大阪商業大学学術情報リポジトリ

廣芝捨吉著『公設市場弐拾年記』（一九三六年）を読む

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商業史博物館 公開日: 2022-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷内, 正往, TANIUCHI, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1250

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

〔史料紹介〕

廣芝捨吉著『公設市場弐拾年記』（一九三六年）を読む

谷内正往

はじめに

近代日本の日用品小売市場の歴史研究は、藤田貞一郎氏、石原武政氏、廣田誠氏をはじめ数々の研究者によって精力的に進められてきた。[1]

日用品小売市場が生まれたいきさつは次のようなものだった。

まず、日清・日露戦争の頃、工業化の進展により都市に人口が集中すると、食料価格の暴騰が労働者の賃金を引き上げ、輸出産業の国際競争力が弱まると考えられた。そこで、政府を中心に生鮮食料品の流通に関心が向けられた。当初は「市場法案」（一九〇七年）、「魚市場法案」（一九一二年）が提案されたが成立しなかった。代わりに同業組合の組織化による市場統制が試みられた。

次に、第一次世界大戦期になると、日用品価格が暴騰した。そこで大阪市の場合、一九一八年市内四か所に初の公設市場を開設した。大阪市が市場の建物を建設し、民間より厳選した販売人に、日用品（魚、野菜、米、薪炭、調味料等）を現金・正札・持ち帰り方式（キャッシュ&キャリー）で販売させた。こうした販売方法は、従来の「御用聞き」「掛売・配達方式」よりも合理的だったので低価格販売が可能になった。[2]

公設小売市場の歴史については一定の研究蓄積があるのだが、具体的な商人の記録という意味では活字になっているものは少ないように思う。[3]

一、史料の概要

今回紹介する資料は廣芝捨吉『公設市場弐拾年記』（一九三六年）である（以下『弐拾年記』と略す。図1参照）。たまたま古書店で購入したもので、この史料は非常に短く、個人の記録に過ぎないのだが、大正期～昭和初期にかけて、塩干物の問屋主人の目から見た公設市場の動向が記されている。管見の限り、ほとんど知られていない史料なので一考の価値ありと考えて紹介するものである。図2は『大阪市設小売市場概要』（大阪市産業部小売市場課、一九三七年）にある、大阪市公設小売市場の分布図である。本文を読むさいの手助けになるので掲載しておきたい。

さて、本文によると、著者の廣芝は兵庫県尼崎市内の出身で、一八七六（明治九）年大阪へやってきて、阿波座にある従兄の米屋に奉公し、次いで一八八一（明治十四）年靭の八木商店に転じて海産物商となり、その後独立し二十人余りの店員を使う卸問屋となった。

一九一八年初めて大阪市が公設小売市場を開くことを聞いて、本業の問屋は番頭にまかせ、その設立段階から深く関与することとなった。大阪市の公設市場は当初四ケ所、臨時で半年間営業するという計画だった。廣芝には境川公設小売市場（現、西区、図2の②）が割り振られた。その市場は「馬繋場式」で売場の横棒が邪魔だったのでそれを切ってしまったという。

ちょうど米騒動の時期と重なり市場は大変繁盛した。彼は毎日市電で境川まで通ったが、当時公設市場開設に反対する同業者もあり、私服の警察官が警護にあたっていたことが明らかにされる。

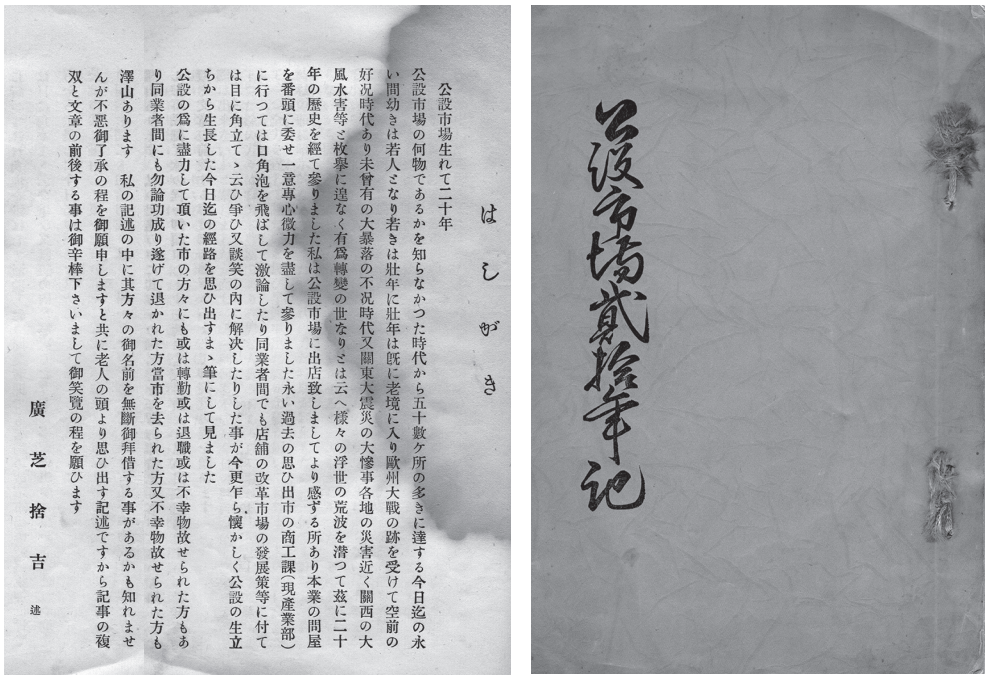
当初四ケ所だった公設小売市場だが、大阪市ではさらに宣伝をするため「巡回公設市場」を計画した、これに廣芝が協力をもとめられて、業者と協力して「天幕式」でしっかりした店舗を出した。「之が当たつて其の売れる事不思議な位で、門前市をなす有様」だったという。

一九二一年、行政から依頼をうけて鶴町（現、大正区の端、図2の⑭）に公設市場を開設した。ここには、市営の住宅地があるものの、市の中心部から遠く人口の少ない葭原だらけ場所であった。そこで、廣芝を中心に関係業者五名が一人あて六～七百円を負担して、荒れ野を切り開き市場を建てたという。さらに、市場は開業したものの売上高が一店舗当たり（一日）五～六円と少なく、二～三年後になってやっと十五～六円から二十円位になった。

元々不便な場所であったため、当初は牛車を雇って運搬する業者もある中、夏季は生鮮食品がすぐに傷むため、輸送時間の長さに悩まされた。色々考えた末、市場全商人の協賛を得て小規模の会社組織にして、「巡行船」を買い入れて商品の運搬をした。[4] おかげで経費が安くついて一般客にも喜ばれたという。

当時、廣芝と関係が深かった市の担当者は商工課長（後、産業部長）・矢柴匡雄と役職不明（後、市場冷蔵専務）・堀政秀であった。彼らが廣芝に新規公設小売市場の設置について種々協力を求めてきたという。矢柴については、「公設市場生みの親」として『大阪公設市場

図１．『公設市場弐拾年記』表紙、はしがき



はしがき

公設市場生れて二十年

公設市場の何物であるかを知らなかつた時代から五十數ケ所の多きに達する今日迄の永い間幼さは若人となり若きは壯年に壯年は既に老境に入り歐州大戰の跡を受けて空前の好況時代あり未曾有の大暴落の不況時代又關東大震災の大慘事各地の災害近く關西の大風水害等と枚擧に遑なく有爲轉變の世なりさは云へ樣々の浮世の荒波を潜つて茲に二十年の歴史を經て參りました私は公設市場に出店致しましてより盛ずる所あり本業の問屋を番頭に委せ一意專心微力を盡して參りました永い過去の思ひ出市の商工課（現産業部）に行つては口角泡を飛ばして激論したり同業者間でも店舗の改革市場の發展策等に付ては目に角立てゝ云ひ爭ひ又談笑の内に解決したりした事が今更乍ら懐かしく公設の生立ちから生長した今日迄の經路を思ひ出すまゝ筆にして見ました

公設の爲に盡力して頂いた市の方々にも或は轉勤或は退職或は不幸物故せられた方もあり同業者間にも勿論功成り遂げて退かれた方當市を去られた方又不幸物故せられた方も澤山あります　私の記述の中に其方々の御名前を無斷御拜借する事があるかも知れませんが不悪御了承の程を御願申しますと共に老人の頭より思ひ出す記述ですから記事の複双と文章の前後する事は御辛棒下さいまして御笑覽の程を願ひます

廣芝捨吉　述

出所：廣芝捨吉『公設市場弐拾年記』1937 年。筆者所蔵。

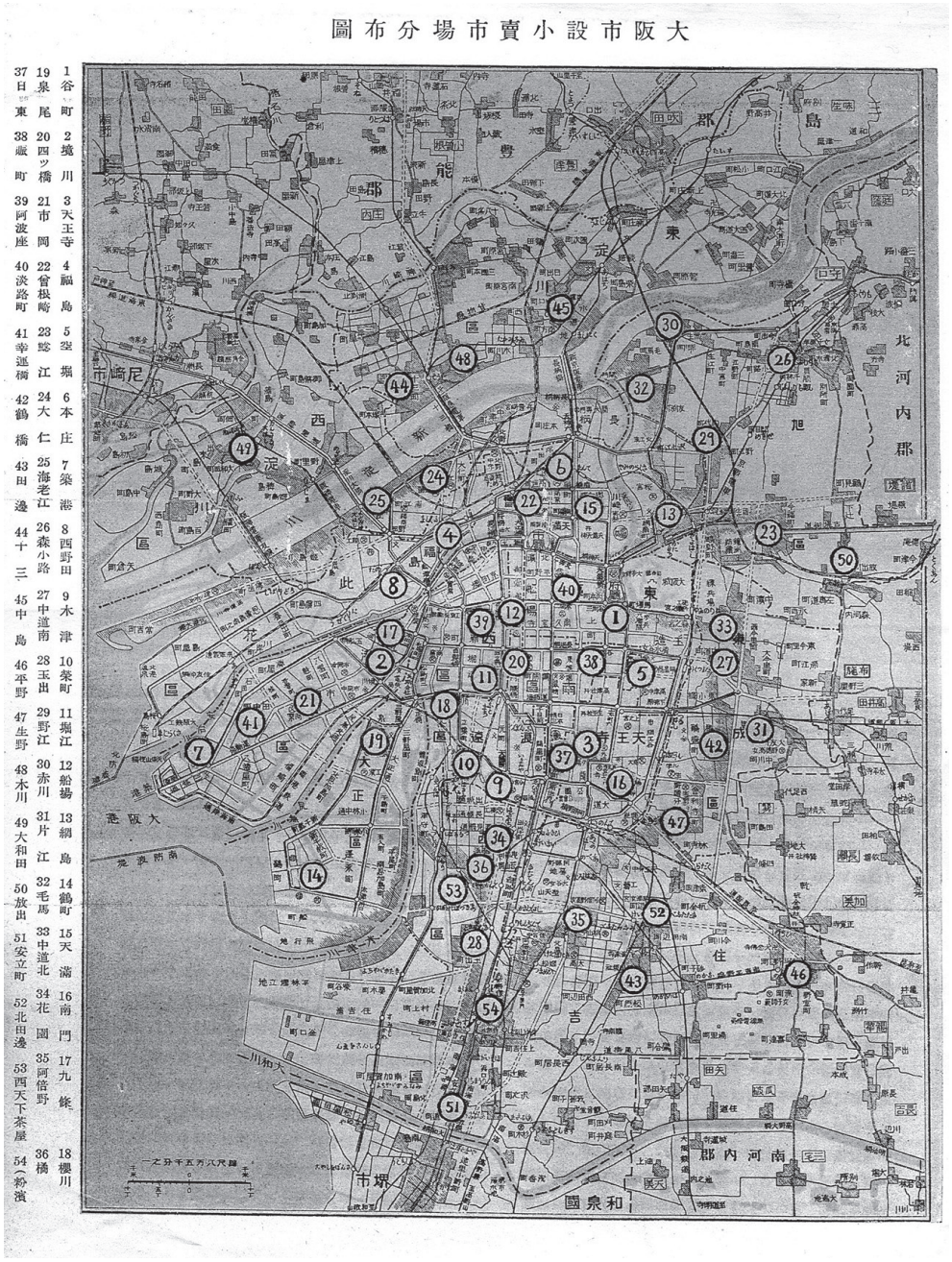
７０年史』に記されている。[5]「一寸油断すると退場を勧告される。朝九時に店が出揃はなかつたり、出勤簿に捺印を怠つても軽くて始末書をとられる。それほど監督を厳しくし良品を特に廉売することに全力を傾注したのである。あの精悍な公設市場産みの親、矢柴産業部長が市場へ現れたら泣く子もだまると云つてよい程商人が緊張したのであつた」という。

矢柴の経歴を『新大阪大観』（一九二三年）からみておくと、[6]矢柴は大阪南河内郡平野出身で、一八七八（明治十一）年生まれ。東京の城北中学に入り、一九〇二（明治三五）年早稲田大学卒業後、約一年間貴族院書記を経て日露戦争により東京万朝報特派員として朝鮮仁川に派遣され報道に携わる。一九〇六（明治三九）年帰国し、同社大阪支局勤務となる。その後約五年間のうちに大阪市府の政情経済に通じ、途中他社の記者となるも、一九一一年大阪市役所港湾部員に転身する。一九一七（大正六）年十二月大阪市商工課長に就任する。経済眼にすぐれ、接触交渉が庶民的で、しかも難事を談笑のうちに解決するという。

矢柴は元新聞記者という異色の経歴であるが、大阪の政治経済事情に明るく、その能力が買われたのであろう。ただし、当時このような起用の仕方が一般的であったのかどうかは不明である。[7]

以下、史料では、衆議院議員・樋口伊之助との出会いや、船場、阿弥陀池、四貫島への出店、皇室関係者、東京公設市場聯合会関係者の来訪を歓迎する様子などが描かれている。

図２．大阪市公設小売市場分布図（1937 年）

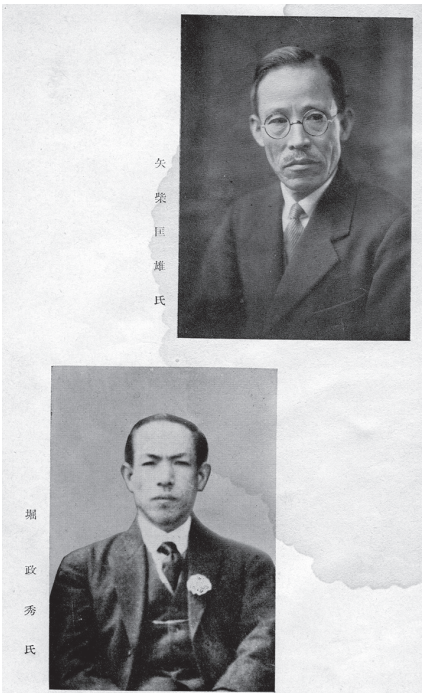


出所：『大阪市設小売市場概要』大阪市産業部小売市場課、1937 年２月。

これまでの研究で小売市場の「人的な問題」を扱ったものは前出・廣田誠氏の研究があるぐらいで、管見のかぎり全体としてはほとんど見られない。これは「人的な問題」に関心がないのではなくて、資料的制約があるからだろうと推測するが、小売市場に参加する商人の出自や彼らの人的ネットワークはやはり重要である。当初は海のものとも山のものとも知れなかった小売市場が充分な品ぞろえをするためには、業者の選定が欠かせないと思うからである。

本史料によって、著者の廣芝捨吉をはじめ、行政側の矢柴匡雄、堀政秀がどんな人物でどんな活動をしていたのか、業者側との交流がどのようなものであったのか、公設小売市場の物理的な構造や業者組織など、これまであまり知られていない事柄が断片的ではあるが、明らかにされる。

図３．大阪市公設小売市場関係者



出所：前掲『公設市場弐拾年記』。

二、廣芝捨吉著『公設市場弐拾年記』（一九三六年）―全文

※引用にあたっては、1．旧字を新字に改め、2．読みやすくするため適宜句読点をつけた。3．明らかな誤字は改めた。4．本文にある公設小売市場の場所を図2から調べてカッコ内番号で示した。ただし途中で廃止されたものは「不明」とした。

序　大阪市の公設市場が六大都市中優越の地位を確立し、其が社会的機能を遺憾なく発揮し得たるは、全く出店商人の理解ある支援に俟つ處大なるものがあつたからである。

特に、廣芝君は試験的施設当時から今日に到る迄、公設市場の発展と向上に終始されたことは真に感激に耐へない。若し夫れ大阪市公設市場史の編せらるとせば必ずや其第一線に表はるゝものと信じて居る。

今次、同君が公設市場二十年記を述し、弘く知友に領たる啻に関係者にとりて恰好の追憶たるに止まらず商人にとりては無上の参考たる可く市場外の人々にとりても亦趣味深き手引草たるべきこと疑を容れない。

予、公設市場に関し同君と労苦を共にした関係上、此二十年記の成たるを見て衷心欽快禁ずるなく茲に蕪辞を列ねて序としたのである。

昭和十一年忍び寄る秋　　南海沿線高師の浜にて

堀　政　秀

はしがき

公設市場生れて二十年

公設市場の何物であるかを知らなかった時代から五十数か所の多きに達する今日迄の永い間、幼きは若人となり、若きは壮年に、壮年は既に老境に入り、欧州大戦の跡を受けて空前の好況時代あり。未曽有の大暴落の不況時代又関東大震災の大惨事各地の災害、近く関西の大風水害等と枚挙に遑なく有為転変の世なりとは云へ、様々の浮世の荒波を潜つて茲に二十年の歴史を経て参りました。私は公設市場に出店致しましてより感ずる所あり。本業の問屋を番頭に委せ、一意専心微力を盡してまいりました。永い過去の思ひ出、市の商工課（現産業部）に行つては口角泡を飛ばして激論したり、同業者間でも店舗の改革市場の発展策等に付ては口に角立てゝ云ひ争ひ、又談笑の内に解決したりした事が、今更乍ら懐かしく公設の生立ちから生長した今日迄の経路を思い出すまゝ筆にして見ました。

公設の為に盡力して頂いた市の方々にも、或は転勤、或は不幸物故せられた方もあり、同業者間にも勿論功成り遂げて退かれた方、当市を去られた方、又不幸物故せられた方も沢山あります。私の記述の中に其の方々の御名前を無断御拝借する事があるかもしれませんが、不悪御了承の程を御願申しますと共に老人の頭より思ひ出す記述ですから、記事の複双と文章の前後する事は御辛抱下さいまして御笑覧の程を願ひます。

廣芝　捨吉　述

本文（一頁）

丁度、欧州大戦の余波は好況の波を我全国津々浦々迄波及し、其渦は当靭迄余慶を及ぼし、皆其渦中に踊る時、大正七年四月甫（はじ）めの或日、市の商工課より海産物事務所取締に対し「此度大阪市四区ニ渉リ公設市場四ケ所ヲ設置スル故、一ケ所ニ三名宛貴組合ニテ最適ト認メル希望者ヲ選ビ塩干小売商ヲ営マシムル可ク申出ル事」との通告があつたと云ふ事を吾々二百余名の業者に通達が廻つた。そこで其通達を見せて貰つた處が公設市場を設置して小売をさせると云ふ丈で、是が何う云ふ意味のものかサツパリわからない。不審で堪らない。聞き合わせたら、市が監督して小売をさせると云ふ事ががわかつた。それを聞いた時、私の頭に暗示的な閃（ひらめき）があつた。「時代の力だ、時期が到来したのだ」。何でも許可して貰つて一つ全力を盡して見たいと思ひ早速申出た處が、念願が届いて私外十一名の者に許可が下つた。余の方々は資力も豊富であり、有力な人許りであるのに、私は独り微力にして迚も追随は出来ないかと案じましたが、而し精神一到何事不成だ、今日の精神を飽く迄変ぜず遣り遂げて見る可き堅い決心の元にスタートを切りました。

或日、取締に引率されて十二名が商工課へ行き種々参考になる事を聞き、出店す可き場所を抽選の結果、私は山本寅吉氏と大島氏と共に境川公設（図２の②）が振り当てられた。愈々市場が決定

（二頁）

したので、自宅にゐる時は羽織の一枚も着て懐手で居たのが、厚司に股引握太のステツキと云ふ服装で毎日市電をかり愈々公設通いが始められた。店舗も抽選で大変よい場所が与えへられ、そして四ケ所一斉に開店の運びとなつた。之正に大正七年四月十五日の事である。

其時分の事務員は山田氏（現、福島公設〈図2の④〉に居られる）で大変厳格な方で、其方の元に吾々新米が而かも靭風が抜け切らない者が出したのだから骨の折れた事だつたろうと思ひます。与へられた店舗たるや、今思ひ出しても吹き出したくなる様な面白い馬繋場の様に正面に檜丸太を一本打ちつけてある丈けで、吾々が持つて行つた商品は其儘並べて只売ると云ふのみの店だ。そして其時分の境川のお客は現在と違い、百人の内八十人迄帯を締めて来る人が無かつた。それは一般市民の頭に公設市場は市が中流以下の人の為、之を救済する意味で設置された様に思つてゐる故、上流の家庭では歯牙にもかけず、其人達の足は自ら向かず、例へば中元歳暮の贈答品の如きも公設の名が入つてゐると取り替えて呉れと云つて来る人がある様な始末で困りました。

而し兎も角も店は売れた。或日何う考へても邪魔になる前の丸太の両端を切り、今思へば子供欺しの様でも一寸変つた容器に商品を入れ、手綺麗に陳列し小売店らしくして見た。サア大変だ。事務所から一寸来いと云ふお達し。適切り

（三頁）

お目玉を覚悟の上行つた。案に違はず事務員から無断で丸太を切り、勝手に店を改造するとは何事だ、怪しからぬと大目玉。云い訳は商工課へ行つてせよと大変なお怒り。早速に商工課へ罷り出た課長さんから、何う云ふ理で無断で丸太を切り店の改造等をしたかとのお尋ねで、私は私の自信を披瀝し、馬繋場の様な店構えで仮りにも市最初の目論見たる公設市場が発展する事は至難である。又吾々商人も黙つてはゐるが、売り易い店、買い易い店そして多少の体裁も考へてゐるが、何分市が監督と云ふ丈で皆控へてゐる。だから、私の無断で改造した事は悪いけれど、一応出来上がつた店を見て理否の判断を願ひたいものです、と申しますと、それでは一度見てからと云つて早速見分に来て下さいました。

然るに案外と之はよい小売店らしくなつたと却つて褒められて、一層全部の丸太を切り取り改造しては何うかと云ふ事になり、当境川は勿論、他の三ケ所も改造され、馬繋場式の市場は現在の百貨店にも劣らないよい店となる改革の端緒をつくつたのです。

然るに大阪には其時分から各商販（売カ）の卸売小売商の組合があつた。此の組合が聯合して公設市場に反対して来た。そして公設に出してゐる商人の本店即ち問屋では品物は買はない、又買つた代金も支拂はないと云ふ決議をした。之では肝心の本店が売れず、又金も呉れなくては困ると折角揃つた商人が一人去

（四頁）

り二人減りして公設市場は歯の抜けた様な状態に淋しくなつた。其内青物は近くの農会から持つて来てゐたが、之も仲々思ふ様に品物が揃はず、表に売りに来る人に迄頼んで売つて貰つた様な事もあつた。農会から来る青物も素人では良否の鑑別がつかないので、青物に経験のある小松さんを当市場に来て頂き検査及び監督して貰ひました。而し外の品物の方は反対の火の手は盛んになる許りで、私設市場等は小売組合の後援で大変な勢いだ。私の靭本店も私設市場や小売商人が不買同盟の様な事をやり買つた代金は支拂わず、大分影響を受けましたが、私はどんな反対にも打ち克ち之に対抗して成し遂げる可く尚決心を堅めました。そして、歯の抜けた様な境川公設にもう一軒の店を出し（現在の便所のところ）多少でも淋しさを去り、賑かさにす可く努力しました。

或一日市場を終り本店に帰る電車の中で見知らぬ人から突然『廣芝君、僕は君を朝向ひに行き帰りにはこうやつて送つてゐるのだが、君知つているか』との事で、意外の言葉に私は驚き「貴郎は何誰ですか。又何う云ふ理で送り向かいして下さるのですか」と尋ねますと『僕は九条署の者だが、公設反対問題で君の身辺に危機の迫つてゐるから充分注意せよ』との言葉、私は今更乍ら反対の深刻な事に驚ろくと共に署の方に心から感謝し、そして益々堅い信念の元に死力を盡して目的の貫徹に邁進

（五頁）

す可く決心した。其努力の結果か、反対の火の手も追々下火になり、商人もボツ〳〵戻つて来て市場も大変賑に活気も出て来た。兎角する内に大正七年も終り、翌八年が来た。物価は騰る許り、景気が良いのやら悪いのやらさつぱりわからない。其時突然起つたのがアノ米騒動、サア大変、市中至る處に起こる悲喜交々の騒ぎの時、全市の米屋は一軒もお米を売らないので買置の出来ない為、市中の台所は困る許り。然るに公設丈けは米を売りました為に、来た!!来た!!老も若きも貧富問はず未明三時頃から人の波、四列縦隊の手に手に雑多な容器を携へた米買軍が電気会社の正門迄も続く繁盛振りであつた。此の時分から一般市民の頭に公設市場の有難味が徹底して社会から認められた最初であつた。

世の中は何が幸になるかわからないものです。米騒動から公設と云ふ物がわかり、追々売り上げも増し、今度は上流社会もどん〳〵来る様になり公設の品位がずつと向上して来た。各店は手不足を感ずる位忙しく、私の店でも数百円の売上のある日が幾日も続いた位であつた。又次第に店も改革し、最初の店の姿はなく見違へる許りになり、其年も暮れた。

明けて九年の或日、商工課の矢柴（匡雄―引用者）様から一寸来て呉れと云ふ事だつたので、何か知らんと思ひ役所へ行き矢柴さんに逢つた所が『廣芝君公設市場も君達のお蔭で大変盛大にな

（六頁）

つて来て市でも非常に喜こんでゐるが、もう一つ宣伝が行き届かないので、此處に徹底的な宣伝方法として、巡回公設市場と云ふものを拵へて見たいと思ふが、一骨折つて貰へんだらうか』と云ふ打解けたお話、そこで其理を聞くと市中の成る可く賑かな場所で周囲に障害なく天幕張りの店で五日間の日程を以て市場の出張所を開き、一つには宣伝一つには商人の為にやると云ふ事で、店舗は市が選抜し、店数は三十五とし、小さい店は二間、大きなのは三間の間口と云ふ様な事だが、境川公設の青物屋井村君と二人骨折つて呉れないかと云ふことでした。

私も之は面白いかも知れん、一つ引受けて見る可く、井村君と相談して愈々其準備にかゝりました。それから、毎日二人で宣伝しながら空地を探しに出かけたが、そんな都合のよい空地が待つてましたとザラにある理のものではない。而し、一旦引受けたのだから、何でもと私達は懸命に努力して候補地を見付けると、早速市へ報告し、萬谷さんに検分に来て頂き、よいと云ふ事が定まつたら、今度は堀さんが警察の手続きをして下さつて許可を受け、車止の誓札を貰つて、此處に愈々三十五店舗が揃い協力して出張開店する事となりました。處が之が当たつて其の売れる事不思議な位で、門前市をなす有様で面白いのだが、私達は落ちついてゐる理に行かないのです。次の店を探さねばならんのと、次の場所が決定すれ

（七頁）

ば宣伝ビラを蒔くやら、宣伝方法を考えるやら、早朝七時頃から井村君と私はテンテコ舞ひの忙しさ、お話しにならない位でした。

或日、現阿波座公設（図２の㊴）の前、公園の東側に巡回が来た時、夕方私が市場の前で宣伝用の器具を作つてゐる時、堀さんが見廻りに来られて『今日は』と互に挨拶の後、私が『堀さん、貴郎も喜んで頂かねばなりませんよ。市の商工課が何處にあるやら、又何をする所やら、堀さん、貴郎がどんな方やら、矢柴さんがどんな方やらわからない人が多かったのに、吾々商人のお蔭で一般市民にハツキリ覚へさしました。尚、商工課や貴郎方の功績を認めさせ、今日等も夕刊に巡回市場や公設の効果を書き、商工課堀氏曰く云々と麗々敷記事が書いてあつたでせう。礼を云ひなさいよ』と堀さんの肩を叩き乍ら、笑って申しますと『そんなに威張らなくとも良いじぢやないか』と云はれ、大笑ひした位に公設の勢は盛大なものであつた。

其時、第一隊の私達の成績が良好なので、今度は第二隊を編成して尚宣伝すべく、小倉昆布店の主人を隊長として繰り出して来た。第一第二隊の競争的進出で尚力が這入り、どん〳〵良成績を挙げた。斯くして多端な九年も暮れた。

（八頁）

明けて十年の或日、電話で市へ行き矢柴さんに逢ふと、今度は鶴町（図２の⑭）に公設市場を拵へたいが外でもない、鶴町には市の社会

課が建築した市営住宅があるので、此處に住む人々が離れてゐるのと近所に商家が少いので、非常に不自由を感じてゐるから、是非盡力して開場して貰ひたいとの話で、兎に角一度現場を見せて頂きませうと直に堀さんと共に行きました。堀さんから指差される場所を見ると、斯は如何に、現在住む方は嘘だと思はれるかも知れませんが、狐狸の棲家の様で、近所に人家とてはなく、一面の葭原で開墾してかゝねば何うにもならない處なのです。未だ三丁目ならば見込みもあるが、こんな處では何うにもならないからと云ひましたが、市では此處でなければいけないと云ふのです。且つ市には今お金がないから商人の方で普請はせねばならず、いろ〳〵考へましたが、妙案も浮かばないので、何うしても有力な人を仲間に引張り込むより外はないと思ひ、堀さんに、兎に角私はやらせて頂きますから、左の人々を明日にでも市役所へ呼んで相談しては何うです。私は何も知らん顔して賛成し尻押し致しますからと約束し、翌日市で菓子の信岡氏、漬物の岡田氏、牛肉の鈴木氏、青物の井村氏と私の五名が会見致しまして、席上矢柴さんや堀さんから相談的な無理押に承諾しまして一

（九頁）

人宛六七百円の負担で葭原を切り開き曠野の真中に公設市場が出来上がりました。周囲に家がなく、よく目立つ事でした。

斯くして献立は出来ましたが、扨出す商人がありません。仕方なく私達一人で五六ケ所の色々な店を開店し、公設らしく開場は致しましたものゝ、売上が合計五六円位と云ふ惨さ。而し、辛抱は金で二三年も経ますと一店舗一五六円から二十円位の売上の出来る時分には近所にも住宅が建てつまつて来ました。すると現金に商人も追々集まりますから、適宜に店をわけて自分の本業一本に力を入れる事が出来る様になり、皆一様にホツと一息入れました。

然るに又二三年したら大暴風が吹き、常にでも風当りのよい處なので、市場の屋根が遠く大運橋の河中に飛んで仕舞ひ、商品は雨に濡れて何うにも手のつけ様のない始末で、早速市へ話して、萬谷さんに来て頂き現状を見て貰ひ、此儘捨て置く理にもゆかずと云つて、私達が一度やり直すと云ふ事も到底望まれない事ですから、此儘でそつくり市へ買つて貰ひ、改めて市が改築とか新築とかをして商人から使用料をお取りになつてはと相談の結果、市へ買つて頂き、四五十円も貰つたのでせう。

斯くして市が修繕して使用料を納め其内に現在の様に改築されて、恥かしからぬ市場となり、いつの間にか周囲にも住宅が建て込んで立派な町が建設せられ、現在となつたのです。而し葭

（一〇頁）

原の曠地の中へ市場を建て、そして町が出来るとは面白い経路を辿つて来たものです。其時分何分にも、遠い處ではあり、又不便で商品の運搬に非常に苦痛を感じました。井村氏は牛車を雇つて運搬せられましたが、之では十一時頃でないと商品が到着しないので、夏季等は殊

に困るので、色々考へた果、市場全商人の協賛を経て小規模の会社組織の様にして巡航船を買入れ、之れにて商品の運搬に充てますと大変早く到着し、相互組織の為に運賃も安く、そして収支償ふて一般からも喜ばれました。之も不便と葭原の公設が生んだ挿話の一つでせうか。

之もいつでありましたか、矢柴さんから呼ばれて行きますと、実は今度築港（図2の⑦）に公設市場を増設する事になつたから、例の通り出店して貰ひたいと云ふお話し。場所は千船橋東詰を北へ入つた所だと云ふ事です。之も考へると廣ツ場です。現在の様に市電の車庫が開けて交差点ではあり、近くに八幡屋新道の様な賑かな通りでもあれば兎も角も、そんな芽生えも見えない時代に、未だ西詰なら大分人家もあり見込みもありますが、東詰では又苦しむのが嫌になり、今度は堪忍して頂きますといふと、そんな事を云つては困る、君の店は当てにしてあるのだから是非にと云ふ事で、それではとお引受けして、早速幹事と云ふ名目で行きまし

（十一頁）

た。廣ツ場にバラックの公設が建つて居ります。そして他の幹事諸氏が一生懸命にお骨折りです。私も仲間入りしまして、いろ〳〵と出来るだけのお世話をさせて頂いて居りますと、其中に一人御年寄りで大きなからだの方が紹の甚平に本ネルの腰巻巾廣の兵古帯と云ふ姿で、皆の商人に、君何の商売や、何處に出すのかとか、其處（ここ）は斯うして彼處（あすこ）は斯うと大変横柄に指図してゐる方があります。

私は一度も逢つた事もなく、市の人では勿論なし。何處の何誰かナと思つて居りますと、やがて私にも尋ねられましたので、私は海産物の廣芝ですと答えますと、先方が、あゝ君が廣芝君か、君の事は聞いてゐた。俺は樋口伊之助だ。よろしく頼むよとの挨拶で、却つて私が挨拶出来損ね、兼而（かねて）名は聞いて居りましたが、逢ふのは始めてゞ、此人なら指図されても仕方がないと思ひ改めて色々と盡して下さる事を謝し、此上共に宜敷と御願ひして、其他種々話しまして直ぐに心易くなり、一度遊びに来い、食事でも一所にせうと親切に云つて頂きました。其上此市場が完成しても、電話がなくては不便だらうからと二本ある樋口さんの電話を一本貸して下さつて大変便利を計つて下さいました。

此公設の建設当初より、其後に至る迄、引続き大変な盡力をして下され陰になり陽になり商人の為、附近住民の為に骨を折つて頂いた事は深く感謝せねばならい。築港公設（図2の⑦）の功労者であり

（十二頁）

恩人です。其後、無理に引張られてお宅へも伺ひ、食事の馳走にもなりましたが、交際させて頂いてゐる内に何となく人を引きつけ、気の朗かな人情味の厚い人であることがよくかわりました。家なき海の子弟達の教育に樋口小学校を建て、第二の国民の教育に盡される心事が私（ひそ）かに首肯できました。

余事は扨置き、御承知かも知れませんが、此市場は真丸い周囲だけ

に店があり、真中は何もない角力（すもう）の土俵場の様な市場でした。之では
いけないと思ひ、幹事諸氏と種々相談の結果、貝氏も魚氏も相当な負
担を覚悟で店や物置を普請し、私も西の入口を拵えるやら、又店構え
を繕ふやらで二百五六十円もかけました。そして隣へ天婦羅屋の店を
出して頂くやらして大分変りました。而し此市場はお客様の通路に屋
根がありませんので雨が降つたら傘なしでは歩けないのです。それで
私はトタン屋根を寄付させて頂き、肉屋さんが板石を寄付して下さる
やら、改造される前の築港公設は、幹事諸氏の一方ならぬ盡力と多大
の犠牲があれだけの市場を完成させたのです。

前述の樋口さんの陰の盡力、幹事諸氏の犠牲、各商人の努力を忘れ
てはならないと思ひます。斯くして二三年前改築されまして見違へる
様な市場となつたのを見るにつけ、轉（うた）た感懐に打たれます。此處も運
搬が遠いので不自由でしたが、市場全体が共同でトラックの便

（十三頁）

を計らつたので割合に楽でした。

之も或一日、市からの電話で矢柴様と逢ひました處が、皆の骨折り
で巡回市場も予想外の好成績を挙げた事は大変嬉しい、且つ幹事諸氏
や商人諸氏に深く感謝する。それで此市場の落着場所をいろ〳〵考へ
た結果、左の通り決定して、目下府の方へ願書を提出してあるが、第
一隊を船場に、第二隊を阿弥陀池と云ふ事としたから宜敷頼むと云ふ
お話でした。而し府から許可が下る迄は本建築はいけないから天幕張
りで巡回市場の様にしてやつて呉れと云ふ事です。早速帰り、一同と
相談致しました。皆で結構だから是非頼むと云ふ事です。そこで私は
市は巡回市場の様な天幕張でと云つてゐるがご承知の市の当分とか許
可云々と云ふ様な事はいつになるかわからない。故、此際思ひ切つて
荒木の柱を打ち込み荒木で屋根も葺き、店割もして其上を天幕にて覆
い、一見一寸見分けのつかない天幕張りにしたら何うかと相談します
と、一同も大分費用が嵩むが少々の風や雨に憂がないから其方がよか
ろうから、萬事宜敷頼むと云ふ事で引受け、早速普請を致しました。

市へ出来上つた事を報告致しますと、警察と両方から検査に来られ
て之は仲々よく出来てゐる上等だと却つて褒められた様な事で、検査
も無難に通り、初めて此處に船場公設（図２の⑫）の第一歩を踏み出
しました。一

（十四頁）

方第二隊は阿弥陀池の大黒おこしやの空地に市の言葉通り、天幕張り
で正直にせられた為に、雨に風に何度も破損し、修繕に費用や暇がか
かり御困りになつた様でした。

又尚一層宣伝をすべく、天王寺公園の博覧会跡工業館で有力な商人
に出店してやつて見て呉れないかとの事を相談され、早速承諾して指
定された商人一同が協議して、大変に立派やかな店を拵へ花々敷開店
致しました。

丁度十一月半頃かと思ひますが、之も大変に当つて売れる事実に面

白い程売れるので、毎日規定の四時に閉店するのが何うも惜くて堪らない。毎日開店閉店正午等の合図の鈴を鳴らす方が小島さんと云つて迚も堅い人で、此方が正面から頼んでも聞き入れられる事は難しいから、或日内証で時計の針を半時間延長して置き、何喰はぬ顔して、商内して居りました。例により何も知らない小島さんが四時の振鈴を鳴らされました。内心ビク〳〵しながらも平気な顔して帰りかけますと、小島さんが後から、今日は廣芝君の正直者に一杯喰はされた。而し之は君が自己本位とか又悪気でやつた事でなく、商売熱心の余りやつた事で、結果が商人一同の喜びであり利益であるから、咎むる所はないと大笑ひをした様な事がありました。此出張も短時日乍ら非常によい宣伝にもなり、又多大の効果を納めました。

（十五頁）

次に四貫島公設（不明）のが出来ますについて、私の懐かしい思出を述べて見たいと存じます。

四貫島公設（不明）が開場と決定致しましたので、是非出店を許可して貰ひたいと思ひまして、願出ました處が、幸ひ許可になり愈々出す可く現場の見分に出かけました。朝日橋迄行き、橋上に立ち、周囲の発展振りを見て思い出すのは私の幼き時の追憶!!

私は尼ケ崎の生れで、明治九年十月初めて東西も知らぬ当地に参りまして、阿波座の米屋で山口元蔵と云ふ従兄の店に奉公しました。そして都合で明治十四年四月靭の吉八木商店に轉じ、海産物商に轉業して現在となりました。山口方に居ります時分から年に二回盆と正月には尼ケ崎に帰らせて頂きます。其折、御主人より二十五銭のお小使いを頂いて、朝日橋を渡り淋しかつた追剥の出る様な此四貫島を通り、新田伝ひに尼ケ崎へ帰つたものです。

其時分、新田の事で長短いろ〳〵な橋が沢山ありました。之を渉るには橋銭が二厘とか三厘とかいるので、之が往復で四銭八厘かかります。大阪へ帰る時は白雪香を十五銭必ず御主人の御土産に買つて帰る習慣になつて居りました。すると頂いたお小使が残るところ五銭二厘と云ふ事になりますけれど、私は外に一厘も使ふ事はなく、只尼ケ崎に帰るのが一番嬉しいのです。

私は三人兄姉で末子ですし、父は私の幼少の頃に亡くなり、今は母一人ですから、年二三回の藪

（十六頁）

入りの楽しさは忘れる事が出来ませんでした。此懐かしい藪入りの通ひ路は、私の現在立つてゐる朝日橋を渡り、此道をコウ真直にと眼前に開ける遥か西を眺める時、路傍に草青々としてゐた道はなく、コンクリートの舗装道路、住宅商店はすつかり建て詰り、黒煙を濛々と吐く煙突の見ゆる大小工場は宛然商工都市のサンプルの様であり、電車自動車は引切りなしに通り、何と斯の変り様。

私は思はず、昔と変わらぬ朝日橋の欄干にもたれ過ぎし丁稚時代の二十五銭を思ひ出すと共に現在の我身を省ました。粗末乍らも洋服を

身につけて居ります。時計だつて下げて居ります。懐中には四五十円のお小使いもある。靭では二十人余りの店員を使う卸問屋の主人だ。公設市場は四五ケ所も出し、尚此四貫島に出店すべく今日来たのだ。嗚呼時代も変つたが、私も変つた。

読んで頂く方は、お笑ひになるかも知れませんが、私は思ひ出に嬉し涙が滲み出て来たのです。余り嬉しくて其儘帰りまして、娘の豊子に私は今日の様に心の底から嬉しかつた事はない。実は斯々の理で現在の身が昔を忍び涙が出る程嬉しかつたよと語りました。娘はお父様何を云つてゐるのです。人に笑はれますよと叱られ乍ら、私には実際忘れられぬ嬉しさでした。斯く思出深い四貫島も開場されましたが、予期した程売れませんでした。此市場に芋問屋さんがありました。大きな芋問屋

（十七頁）

が弟さんに出させて居られます御店です。或一日市場の中へ一杯機嫌の笊を肩にした商人が這入つて参りました。余りよい機嫌らしいので其芋屋の弟さんが莞爾と笑つて会釈されますと、其人が酔眼を見開き何が可笑しいのだ。俺の顔に何か附いているかと執拗く引懸つて来たのでゴチ〳〵云ひなさんなと相手にせなかつたのですが、乱暴も致兼ねない有様に此処でゴチ〳〵云つては困るから、表へ出よと云つて一言二言の言葉の云ひ争ひから芋屋さんも辛棒し兼ねて、雨の中に活劇が演ぜられ打倒され酔漢（よいどれ）は打倒され酔漢はホウ〳〵の体にて帰りましたが、偖（さて）而翌日、二人の若者が市場の事務所にやつて参りまして、昨日内の若い者が乱暴したとの事、大変済まなかつた。其折り市場の中ぢやいけないから表へ出ろと云ふ言葉であつたそうだが、市場外なら何をしてもよいのか一寸返事が聞かせて貰ひたいと大きな名刺を持つて来ましたので、早速何とも取計ひ難く、後刻返事を致しますと帰つて貰ひました。名刺を見ますと此近辺で名の通つた親方なので、幹事四五人寄つて相談し、兎に角謝りに行かうと酒肴料金一封持つて行き種々事情を話し、御詫びしました處、表へ出ろと云つた事が非常に気に障つたらしい事が了解できると、竹を割つた様な気分の人だから判りが早く、事情さへ判然とすれば何も云ふ事はない。それで結構です、却つて気の毒でした、

（十八頁）

而し、酒肴料等一切頂く必要も理もないから之は持ち帰り下さいとの事でした。立派なお宅で若い人の四五十人もゐる親方は何處か違つた所があると関心させられました。其事があつてからそれが縁となり、ずいぶん市場の為に盡力して頂きました。

或年の事、東京公設市場聯合会の方が二三十人当地の公設を視察傍々下阪されたので、私達公設の幹事は其接待の任に当り、毎日自動車で全市の公設を案内しました。終つた日、新町の木の花踊りを見物し、雁風呂で歓迎宴会を催しました。市からも矢柴さん、堀さん始め四五名列席せられ、矢柴さんの御挨拶がありまして、そして座談会に

移りました。其席上、私は今日東京のお方と々中央大阪の公設についていろ〳〵お尋ねがあり、水道料、電気又は使用料等の話の末、売価は市の指定通りにやつて居られるらしい。市の仰せは万事御無理御尤とお聞きの由だが、そんな馬鹿気た事がありますか、商人は商人としての権利を以て處理して行かれたら宜しいのにと云ふお話しがありました。

成程当市公設の商人は何事も、御尤主義で市の御言葉に何一つ背かずやつてゐる事は考へると馬鹿〳〵しい話かも知れないが、而し当大阪は太閤さんの昔より商人の都として名高く、商人には理屈はいらない、何事にも頭を低く、只品物を売る主義なのです。それと異り

（十九頁）

東京は徳川時代から旗本八萬騎の威張つた政治の都、そして学問の都ですから、商人にも理屈の多いのが当然かも知れません。之は両市共伝統の然らしむ所でせう。而し公設も出来て五六年は市も商人の云ふ事を能く聞いて呉れました。一寸位の無理も通して呉れましたが、此頃は基礎も固まりましたので、市の鼻息の荒い事、矢柴さんも、堀さんも迚も鼻が高く迂闊に傍へ寄つたら危なくてならないのですよ。一寸位鼻を折つて貰はないと堪りませんと大笑いして散会いたしました。

又或年は、東久邇宮様が大阪市へ御成りに相成、畏も公設市場へ大臨あらせられ、私も本庄（図2の⑥）にて拝謁を賜ひました。市場の御世話をさせて頂くとは云へ、二十五銭の御小使銭から辛棒して今日となりました無学の私が、此光栄に浴する事の有難さは子々孫々に伝へて其余慶を忍び奉る事と致します。そして記念の御撮影の時は其末席を汚す等、実に畏多き極と存じます。

尚、現在は風月を友として郊外に悠々自適の生活をなされる矢柴前産業部長を始め、市場冷蔵に専務として轉ぜられた堀さん、不幸物故せられました萬谷さん、其他市役所の方々とお友達の様に親い御交際を願ひました事等は忘れる事の出さない懐かしい思出で御座い

（二〇頁）

ます。商売より外、何事も知らない私が七ケ所の公設の幹事を永らく勤めさせて頂きました事も感謝に充ちた事柄なのです。

且つ、私達塩干商が公設商人丈けの会である公友会も結成致しまして、私も度々会長の栄職に就かせて頂きました。そして、幹事諸君と共に吾々商人の為に盡させて頂いたこともありました。

偖（さて）而、今迄書いてきました数々の出来事の多くは、公設が出来ましてから概ね十年か十二三年間の事です。当初は、市の方々も私達商人を頼り、私達も何事によらず市へ相談して双方協力一致で至極円満に運んで参りましたが、受難時代も過ぎ、もう確固たる基礎も出来て大丈夫だと云ふ事になりますと、今度は市の方が大変弱腰になり、矢柴さんも堀さんも迚も鼻息が荒くなつて来まして市場もどん〳〵増設し、商人位募集すれば何時でも集まるはと云ふ様な心持で、従来の商人の希望等仲々聞き入れて下さらない。使用料も遠慮なく徴集される

し、設備も厳重になり、指定値段も一層厳しくなりました。市場が増設される為、同業者が増すのですから売行も悪くなる許りでした。こんな状態が持続すれば、商人が堪らない。之には商人が強固な組合を作り一致結束して、すべてに対抗して行かねばならないと

（二十一頁）

云ふ事実が現れて来ました。私は公設の建設当初より、其希望は持つて居りましたが、色々な仕事に追はれて実現の運びに至らなかつたのです。創生時代も過ぎて、今適切に之を感じて参りました。そこで有志が時々寄合つて種々相談致しますのですが、時期尚早か仲々纏（まとま）りませんのです。斯くする内、川戸氏等の斡旋盡力により西港区丈けが、結束して西港会と云ふ組合が出来ました。私も大変結構なことと賛成をし、小はやがて大となり、全市を一丸とする組合結成も遠からずと喜んで居りました。然るに、何うした事か此組合も永続せず途中行衛不明となり残念で致方ありませんでした。

而し組合の設立と云ふ事は、市の方でも時期に適したと云ふ事を認めて市が許可し、今度は賑町の公設で主だつた者が寄り合い下相談をし、そして大体の条項を定めて或料亭で総会を開き、大多数の賛成を経て幹事を専任し、定款迄作成し愈々結成の膳立が出来ました。そして再度三度と会合致しますと、其都度出席人員が減じ遂に一人も来なくなり、折角市も許可し膳立迄も出来たものが、港で川を割つた様に立消えになつた事は、却す〴〵も残念でした。之も時期が到来しないのだとあきらめ切れない、あきらめをつけて居りました。

斯くする居、公設市場の功労者である萬谷さんが不幸物故せられました。其慰労の件に付き、境川公設屋上で総会が開かれ

（二十二頁）

ました。慰労に付ての決議案が一決致しました後、私は其席上僭越乍ら、聯合会設立の急なることを説き、其必要を力説し、併せて私の抱負を述べました。處が今度は満場一致で賛成可決致しました。私が仮議長に推されまして、種々評議を重ね創立委員を、議長指名と云ふ事になり、不肖を省ず、本庄の名倉氏外数氏を選任し、此處に初めて待望の組合聯合会が設立されました。其後役員諸氏も変り、又規約の変更等のあり、そして現在の立派な聯合会が確固たる基礎の上に何事にも商人の堅い団結の力を以て当り、凡ての事項を處理して行く誇りを見る時、私は永年の希望が達成し衷心より感激の念に堪えられない次第でありますと共に、幸永久に多かれと祈るのであります。

私の記述は此位に止めます。外に種々の事件も又面白いエピソードもありますが、何と云つても二十年来の出来事の為に、忘れた所も多く且つ記述の前後致しました事は深く謝しますと共に御熟読下さいました諸賢に厚く感謝を致しまして記述を終ります。

昭和十一年十月　十日印刷
昭和十一年十月十五日発行　〔非売品〕

大阪市西区靭中通り三丁目二十四番地
発行兼編輯人　廣　芝　捨　吉
大阪市港区魁町二丁目十八番地
印刷所　光文堂印刷所
電話西㊸三八九四番
大阪市港区魁町二丁目十八番地
印刷人　淵　側　国　蔵

注

（1）藤田貞一郎『近代日本経済史研究の新視角』清文堂、二〇〇三年、第二部市場、第三―一二章、石原武政『公設小売市場の生成と展開』千倉書房、一九八九年、廣田誠『近代日本の日用品小売市場』清文堂、二〇〇七年、原田政美編著『日本アジアの市場の歴史（市場と流通の社会史2）』清文堂、二〇一二年、廣田誠・山田雄久・木山実・長廣利崇・藤岡里圭『日本商業史』有斐閣、二〇一七年、第七章「近代日用品市場の成立と展開」（廣田誠・執筆）など多数にのぼる。

（2）廣田誠「中央卸売市場と公設市場」経営史学会編『日本経営史の基礎知識』有斐閣、二〇〇四年、一九〇―一九一頁）。小売市場が成功するためには、卸売段階の改革も必要とされた（同前）。ところで、廣田氏によると、大都市において「現金・持ち帰り」が普及した背景には、都市の人口流入があり、従来型の「御用聞き」では新しい住民への信用取引が十分に機能しなかったためだという。それに対して、満薗勇氏は「御用聞き」が都市住民のステイタス（地位）を表す場合があるために、「現金・持ち帰り」が進まないケースもあると主張する（満薗勇「食料品小売業における販売『合理化』の限界―戦前期東京市の掛売・御用聞きに着目して―」高嶋修一・名武なつ紀編著『都市の公共と非公共―二〇世紀の日本と東アジア』日本経済評論社、二〇一三年）。

（3）原田政美編・解説『近代日本「市場」関係資料集』（不二出版、二〇一一年）には、公設市場の文献が多数掲載されているのだが、卸売市場が中心で、本稿で紹介した『公設市場弐拾年記』は掲載されていない。

（4）巡行船については、谷内正往『戦後大阪の鉄道とターミナル小売事業』五絃舎、二〇二〇年、第一章を参照。

（5）大阪市公設市場70年史編纂委員会編纂委員会編『大阪市公設市場70年史』大阪市経済局、一九八九年、四一頁。

（6）「矢柴匡雄」中川倫『新大阪大観』新大阪大観刊行所、一九二三年、二二八頁。

（7）元鉄道官僚の佐竹三吾の場合、池上市長にこわれて一九二二年から二四年まで二年間、大阪市電鉄部長（後、初代電気局長）に就任している（谷内正往「大阪市初代電気局長、佐竹三吾」『都市と公共交通』第44号、大阪公共交通研究所、二〇二〇年六月）。